

# 平岩俊司著

## 『朝鮮民主主義人民共和国と中華人民共和国 「唇齒の関係」の構造と変容』

世織書房, 2010年

「中国の北朝鮮への影響力はどれほどなのか？」一これまで北朝鮮が核実験や「人工衛星」と称した事実上の長距離弾道ミサイルの発射を繰り返すたびに、日米韓など関係国の当局者や専門家、さらに各国メディアは、こうした問いを繰り返してきた。特に、国連安全保障理事会で北朝鮮への制裁が論議されるたび、安保理常任理事国でもある中国は、常に論議の行方を左右する極めて重要でかつ微妙な立場に置かれてきた。そして制裁決議の実効性は、「中国の北朝鮮に対する影響力行使が鍵となる」という半ば常套句になってしまったような見立てにとどまり、「影響力はどれほどなのか？」という当初の問い掛けは何ら解明されないまま次の事態が推移する、というパターンを重ねている。

中国の北朝鮮に対する影響力の有無や度合いについては、筆者も北京や平壤で幾度となく関係当局者らへの聴取を試みてきたが、中国からは「われわれの北朝鮮への影響力は、周囲で考えられているほどではない」と、時には無力感さえにじませる反応が示される。北朝鮮は「中国とは内政不干渉の原則がある。影響力を行使する、しないの関係ではない」と原則的な立場を繰り返す。現実はそのようではないだろう、と思いつつも、中朝関係の実態に切り込む手だては資料的にも限られており、隔靴搔痒に陥る。

本書は、膨大な資料を駆使して中朝関係の変遷をたどりながら考察を加え、北朝鮮に対する中国への影響力はどのようなものか、という問い掛けが、いかに無邪気なほど単純に中朝関係を切り取るようとしているかを悟らせてくれる。

もとより、中朝関係に関する資料は、両国の情

報統制という大きな壁が立ちただけ、入手自体にかなりのエネルギーを要する。著者は北京の日本大使館政治部で専門調査員として勤務した経験も踏まえ、徐々にではあるが公開されるようになってきた中国側資料を丹念に目配りし、実証的分析を試みている。ここには、大学時代に専攻した朝鮮語に加え、中国語を駆使する著者の語学的な強みも発揮されている。

「……だったはずである。」と推測調で断定する部分がかか所もあり、気になる読者がいるかもしれないし、学術的にさらに一步、踏み込みが必要とする受け止めがあるかもしれない。微妙なニュアンスを学術的な記述で読み取らせようとするのは難しい。著者は触れていないが、中朝関係者との非公式な意見交換の積み重ねがこうした表現の背景にあったであろうことを考えると、資料収集を含め相当な作業をこなしてまとめ上げた力作といえる。

著者は、朝鮮戦争での中国義勇軍の派遣から、中ソ対立、米中接近、冷戦体制の終焉、金日成主席の死去などの朝鮮半島情勢とそれを取り巻く時代状況を縦軸に、中朝関係を特徴づける4つのポイント、つまり①南北統一と台湾解放という革命の課題を抱える安全保障上の関係 ②イデオロギー面での関係 ③伝統的關係（本書の副題にもなっている「唇齒の関係」） ④経済關係一を横軸にして、中朝関係を歴史的、包括的に俯瞰してみた。

構成は次の通りとなっている。

序章 目的と分析視角

第1章 中国人民志願軍撤退と台湾海峡危機

	—中国にとっての北朝鮮
第2章	友好協力相互援助条約と対米認識の共有過程—北朝鮮にとっての中国
第3章	中ソ論争と北朝鮮の革命路線—中朝関係の上限
第4章	両国関係修復の政治力学—中朝関係の下限
第5章	米中接近と北朝鮮の対米直接交渉提案—「唇齒の関係」「伝統的友誼」の綻び
第6章	改革開放路線と体制護持の相克—中国とは異なる選択
第7章	中朝関係の構造的変質—中韓外交正常化
第8章	伝統的関係の終焉—金日成死後の中国・朝鮮半島関係
第9章	二国間関係から多国間関係へ—朝鮮半島と中国の新たな関係
終章	「唇齒の関係」の史的展開と構造的変容

2005年10月に胡錦濤国家主席（当時）が訪朝した前後から、少なくとも平壤の市民生活で衣類や食料、日用品を中心に中国製品を目にする場面は、それ以前にも増して格段に増えた。日本の大手メーカーの商標を付けた家電製品も、よく見ると中国製が大半だ。既に商標自体が一昔前のデザインの為、日中合弁で正規に中国で生産された製品というより、中国企業が一昔前の商標とは知らずに勝手に生産した“なんちゃって日本製品”とみられる。

2006年10月に北朝鮮が1回目の核実験を実施した際、筆者はたまたま平壤に滞在していた。2005年9月に6カ国協議が紆余曲折の末にまとめ上げた非核化の合意を公然と覆す行為だ。北朝鮮の政府関係者の1人に、中国の反発は避けられないが、どう対応するのか、と質問したところ、「非核化を実現する為に核を保有するのだ」という逆説的な答えを返してきた。こうした北朝鮮独自のロジックを、中国はどう受け止めるのか。

いくつかの平壤での取材体験をもとにした「中朝関係の現実と日常」という筆者の関心からみると、本書の第6章「改革開放路線と体制護持の相克」、第8章「伝統的関係の終焉」、第9章「二国

間関係から多国間関係へ」の3章は特に引き込まれ、随所にうなずける分析が展開されている。

特に、第6章の「補遺」として取り上げた「中国の改革開放政策と北朝鮮の経済改革の比較」は、中朝それぞれのリーダーシップを含む国内政治体制の様態、安全保障面など国際環境の相違など多面的な考察を進めており、非常に興味深い。北朝鮮でこれまで何度か改革開放とみられる動きが生じて本格化してこなかった要因の一つに、「保守派对改革派」の対立構造で軍部が改革開放の阻害勢力となっているとの（主に韓国で）指摘される見方について、必ずしも決定的なものではないとの考察は、北朝鮮の政治体制の歴史を丹念に研究してきた著者だからこそ導き出せるものだ。

また第9章で「補遺」として取り上げた「国交樹立60年の中朝関係」では、2010年に国交60年を迎えた中朝の関係史は、「ある種の『いらだち』を蓄積する過程であったと言えるかもしれない。」と指摘した。的確な分析だ。中朝関係が、解きほぐせない「いらだち」を内在しているが故に、「中国の北朝鮮に対する影響力はいかほどか？」という問いが繰り返されることにもなるのだろう。

ギネスブックに最大のマスゲームとして登録されている北朝鮮の芸術公演「アリラン」では、中朝国交樹立60年となった2010年からパンダのぬいぐるみや中国風の衣装をまとうて踊る「中朝友好は永遠」と強調する一幕が新たに登場した。スタンドのカードセクション（人文字）では、中国語でも友好を強調するスローガンを掲げる手の込んだ演出ぶりだった。同年10月に訪朝した温家宝首相（当時）に見せつける狙いもあったと思われる。2013年の「アリラン」公演には、「中朝友好」の後に「朝口親善」のカードセクションも加わった。

本書の第3章「中ソ論争と北朝鮮の革命路線」、第4章「両国関係修復の政治力学」で、北朝鮮が中国、ソ連といかに渡り合い、中ソのパワーバランスを巧妙に利用しながら、金日成体制の「主体」を確立してきたかが分析されているが、今年2013年の「アリラン」公演は、経済分野を中心に存在感が増す一方の中国を無視できないものの、同時にロシアを対中国けん制のカードとして位置づけようとしている北朝鮮の思惑をうかがわせる

演出となっている。本書には、中朝関係で北朝鮮が苦慮し続けていることが、筆者の取材経験とも重なり共感できる分析が多い。

「補遺」で取り上げた2つのテーマは、北朝鮮の金正恩体制の行方を展望する意味においても、必ず検討されなければならないものだ。「補遺」とはなっているが、今後さらに考察分析を加え、中朝関係研究に厚みを加えてほしいと思う。

本書は序章と終章を除く9章仕立てのうち、第1章から第8章までは、著者が慶応大学大学院に2000年に提出した博士論文を基にしている。それから本書が出版されるまでの約10年、中朝関係は2006年の北朝鮮による核実験を契機に、見直しを迫られる局面が続いている。

中国で習近平体制、北朝鮮に金正恩体制と両国に新指導部が登場してからも、中朝関係の推移は、朝鮮半島、さらに北東アジア情勢を見通す上で核心的な要素であることに変わりはない。著者が提示した時系列の事象と中朝関係を特徴づける要素を絡めながら分析するアプローチは、新体制となった中朝関係を考察するにおいても有効だ。

筆者の記者としての立場で欲を言うとするれば、中朝関係を特徴づける伝統的関係などの4つの要素が、中朝の新体制での関係を分析する上でどのような解釈ができるのか、さらに別の要素があるかどうか再検討する作業を、今後の課題の一つとして取り組んでもらえれば、と思う。

もちろん、金正恩第1書記が本書評執筆の2013年8月半ばの時点で、まだ首脳外交を展開しておらず、そもそも最初の外国訪問に中国を選択するのか、という基本的な部分が不透明な状況ではあ

るが、1994年の金日成主席死去で伝統的関係が終焉したとの第8章の考察を踏まえ、新たな関係構築がどのようになるのか、その行方を展望する手がかりを得たいと著者に期待したいのは筆者だけではあるまい。

今後、果たして中国の習近平体制が北朝鮮との関係を、党対党という伝統的な関係から、通常の家対家関係に大胆に転換するのか、転換はしないまでも、その可能性をにじませながら、北朝鮮をコントロールしようとするのか、といった部分に著者が切り込んでくれることを期待したい。米国との「2G時代」という中国が想定する国際秩序の中で、北朝鮮と韓国をにらむ中国が、朝鮮半島政策をどのように展開しようとするのかは、やはり転換点を迎えている日韓関係、さらに膠着状態が続く日朝関係を展望する上でも、常に意識しておかなければならないためだ。

中朝関係を歴史的、包括的に整理、分析し、しかもそれぞれの国内政治事情、さらには米国、韓国との関係にまで目配せしてまとめ上げられた本書は、中朝関係だけでなく北東アジアの現代史も描いてみせた里程標的な研究書といえる。

時代時代で複雑な駆け引きをみせる中朝関係を丁寧な解きほぐして再構築する著者の力量は、2013年春に相次いで出版された「北朝鮮—変貌を続ける独裁国家」(中公新書)、「北朝鮮は何を考えているのか」(日本放送出版協会)といった著書でもいかに発揮されている。この2冊どちらも一読すべき価値があるのはいうまでもない。

(磐村和哉 共同通信社)